

講演 1

学問上の四人の「巨人」

---



後藤明

(南山大学・教授/人類学研究所・第二種研究所員)

今日はお忙しい中、私の退職記念シンポジウムに対面あるいはオンラインでご参加いただき、ありがとうございます。距離は関係ありませんが、オンラインでは遠く沖縄やハワイからもご視聴いただいていると聞いています。ありがとうございます。

偶然にも本日3月11日は、東日本大震災から12年がたった日です。私の郷里の仙台の若林区も被災地とされており、仙台に帰省する際は、車で行ければ壊滅した海岸の集落である荒浜集落の慰霊碑に必ずお参りに行っています。そのような日でもあるので、冒頭に短く黙祷をさせていただきます。

今日は私の研究の歩みを中心に話したいと思います。しかし詳しいお話は私の退職記念論集や、ならびにNPO法人ミラツクや法人の喜界島サンゴ礁研究所のインタビュー記事でも既に語っており、印刷あるいはWebの形で見るができますので、繰り返さないことにします。今日はそれらにあまり載っていなかった内容として、特に自分の歩みに大きな影響を与えた4人の研究者との関わりと、自分の学問的な枠組みとの関連をお話しします。私は彼らを「4人の『巨人』」としています。厳密な定義はありませんが、自分の研究に大きな方向付けを行った人であり、それぞれの分野で今でも参照される理論やデータを提示してくれた人、さらに私がまだ乗り越えられないと感じている人です。全員故人となりましたので、場合によってはやや裏話的な話題も紹介しながらお話しします。

また、今日のパネリストの3人と私は、まず考古学が出发点であること、京都で行った環太平洋神話研究会や、考古学的民族誌研究会、万葉古代学研究所の共同研究、神奈川大学の国際常民プロジェクト、さらには沖縄の海洋文化館にさまざまな形で関わったという共通点があります。

#### ■ 4人の巨人

今日お話しする4人の巨人とは、渡辺仁先生、大林太良先生、篠遠喜彦先生、遠藤庄治先生です。今日は全員を「先生」ではなくて、「さん」付けで呼ばせていただきます。篠遠さんだけ93歳というかなりの高齢までご活躍されましたが、大林さんと遠藤さんは72歳、渡辺さんは79歳で亡くなっておられます。

私はこの4人について、既にそれぞれ何らの形で論評を行っています。渡辺仁さんに関しては、国立民族学博物館の岸上さんが編集した『はじめて学ぶ文化人類学』（岸上（編）2018）でコラムを書いていますし、大林さんに関しては先日アンソ

ロジ（後藤（編）2022）を出す機会があり、私が責任編集を務めました。篠遠さんに関しては、秋道智彌さんと印東道子さんが編集した『ヒトはなぜ海を越えたのか』（秋道・印東（編）2020）という篠遠先生の追悼論集のようなもので先生との出会いについて書きました。遠藤さんについては、沖縄の弟子さんたちがNPO法人沖縄伝承話資料センターから出した追悼論集（NPO法人沖縄伝承話資料センター（編）2006）にも論評を書かせていただきました。

### ■ 1人目の巨人・渡辺仁

1人目は、渡辺仁（わたなべひとし）さんです。私が学問を始めたのは東京大学の考古学研究室で、そのときの主任教授が仁（じん）さんでした。仁さんは、理学部人類学科出身であるのに文学部の教授になったという異例の経歴を持っています。仁さんはこのことを宴会のときに何度もおっしゃっていました。

アイヌ・エコシステムの研究で世界的に知られる仁さんですが、若い頃は縄文時代に興味を持ち、『人類学雑誌』（日本人類学会）などに幾つか論稿を書いていました。しかし、そのベースはアイヌ研究でした。アイヌの生活構造には、母村と狩猟キャンプとの併存、男性が狩猟をして女性が採集を行うといった男女の役割分担などがあります。当然、空間利用も男女で異なります。仁さんは、そうしたアイヌの民族事例から、当時の日本の考古学が関心を持たなかったセトルメントの複合的な構造、つまり母村的な遺跡とキャンプ的な遺跡の違いなどを指摘しました。当時の日本の考古学では、一つの地域内の遺跡データを集積し、最大公約数的に地域の特徴を描くことで地方差や時代差を示すという手法が主であったので、仁さんのアプローチはとても画期的だったと思います。

当時、ヨーロッパの旧石器の研究では、同じ時期の異なった石器組成を文化集団の違いとする文化史的なアプローチを取ったフランソワ・ボルドなどの見解と、同時期に存在する異質な石器組成は、機能の違い、つまり母村と動物解体場所などの違いであると主張する生態学・機能的なルイス・ビンフォードの論争が始まっていました。ビンフォードは、そのモデルとして後に北方イヌイットの研究を始めるのですが、実はそれを刺激したのが渡辺仁さんのアイヌ研究であるといわれています。そのきっかけは、1966年にシカゴ大学で行われたMan the Hunter（『人間・狩猟民』）という記念碑的なシンポジウムです（図1）（Lee & DeVore 1968）。2人はそこで同席していて、ビンフォードが仁さんから大きな刺激を受けたらしいのです。その後、

仁さんはビンフォードに招かれ、ニューメキシコ大学で教鞭を執っています。どのような影響を与えたかに関して仁さんはあまり話していませんでしたが、『古代文化』45巻の「土俗考古学の勧め：考古学者の戦略的手段として」（渡辺 1993）という論稿の中には言及していますので、ご覧いただくと分かりやすいと思います。

#### ■渡辺ゼミでの学び

仁さんはアイヌのエコシステムに関して居住する川筋の周りにいろいろな生態ゾーンがあり、男女がそれぞれの季節にどのゾーンを利用してどのような活動をしたかというモデルを提唱し

ています。私が仁さんの考古学概論を大学2年生のときに取った聴講ノートを見ても、その図を書いています。考古学の概論なのですが、アイヌの生活パターンを書いているのです。今だったらパワーポイントを使うでしょうが、1975年にパワーポイントは存在しません。また、この図のコピーが配られていたとしたら、私はノートに貼り付けていると思います。だからおそらく仁さんはこの図をスライド映写機で見せたか、あるいは直接黒板にチョークでこの図を書いて、それを私も一生懸命メモしたのだらうと思います。

私は大学3年生だったとき、考古学の中で海に興味を持ち、卒論や修論では北太平洋の銚頭や釣針で論文を書きました。修士1年生のエスノアーケオロジーという仁さんのゼミで、アイヌ研究をモデルにして北米北西海岸のセトルメントや空間利用、季節移動などについて発表すると、仁さんはとても喜んで、「君、期待しているよ」というような意味のことを言ってくださいました。アイヌのシステムでは母村とキャンプがあり、比較的小コンパクトな日本の地形においては、アイヌの人々は基本的に定住します。ところが北西海岸はもっと地形が大きいので、母村、夏の村から集団全体で移動します。つまり、アイヌと気候もよく似ている北西海岸は、サケ・マスなどをベースとした安定的な狩猟採集経済ですが、アイヌの場合は母村があってそこから出て帰ってくる一方、北西海岸は実際に移動することがあるというコントラストがあるのです。北西海岸に興味を持った私がそれについて仁さんのアイヌ・エ

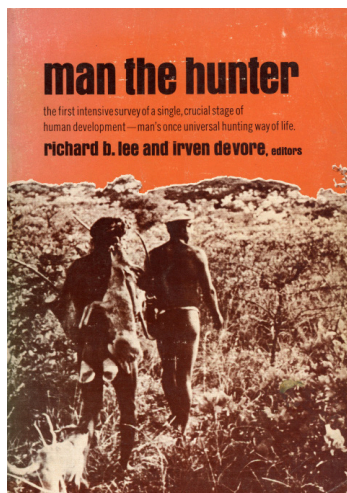


図1

コシステムをまねた表で比較して発表したところ、仁さんは「わが意を得たり」という感じで喜んでくださいました。

私が考古学研究室に進学した直後の3年生のときの最初のテキストは、アメリカの民族学者・オスグッドの *Ingalik Material Culture* (Osgood 1970) でした。考古学の最初のゼミで民族誌を読まされたのです。そのときは意味が分からなかったのですが、これは、誰がいつどれくらいの期間で、どれくらいの頻度で、どこで道具を作るのか、そのときに出るごみ、音、においはどうなのかといったことまで記述している民族誌です。その道具の耐久性、ライフサイクル、修理はどうするのか、どう保持してどう動かすのかということも含まれます。それまでの民族誌は、物質文化は記述して絵を描いて終わりでした。ところがオスグッドの場合は、道具をどう握ってどのように動かすかまで記述しないとイケないという考えでした。これはフランス技術人類学のオードリクールやルロワ＝グーランの視点と並行しています。オスグッドの物質文化の記述方法では、外観、名称、製作（材料、組み立て、製作場所、製作時期、製作者）、使用（用途、使用方法、使用における変異、使用場所、使用時期、使用者、使用寿命、所有権）等を記述しなければなりません。例えばナイフも、どのように手に持ってどのように動かすのかまで記述しなければ物質文化の記述は成り立たないということを、私も物質文化の授業で学生に教えるためにオスグッドの民族誌を例として使っていました。

考古学は物質的証拠から人類の生活や進化を論じる学問ですが、物質文化といっても民族誌のそれと考古学史とは似て非なるものです。博物館展示の民族資料はセレクトされたいわゆる名品が多いのですが、遺跡から出てくる遺物は、破損品や製作ごみを含めた雑多品の総体です。考古学者は、そこに何らかのパターンを見い出して過去を推論します。仁さんはこれをよく分かっていて、民族誌や物質文化の研究ができると考古学にすぐ結び付くというような安直な結び付け方は良くないことを教えるためにオスグッドを使ったのだと思います。

さらに、仁さんの考古学概論の中では、「破損品考古学」ということが言われていました。仁さんが日本で石器の研究をしていた当時の考古学者たちは、完形品の石器だけを持って帰っていて、いわゆるフレークのようなものは見ていなかったそうです。しかし、製作全体の体系をやらなくてはイケないと考えていた仁さんは全部持って帰り、破損品やごみも重要であるとしました。このことを言っていたのもオスグッドの *Ingalik Material Culture* なのにつながりがあります。

私の修論のテーマは、北太平洋の釣針でした。仁さんのゼミで割り当てられたラインマン (Reinman) の *Fishing* (Fred M. 1967) というオセアニアの釣針研究などが、私の研究を大きく方向付けました。本当は、篠遠喜彦さんらの書いた *Hawaiian Archaeology : Fishhooks* (Emory et al) 1959) という本が私に割り当てられていました(図2)。私もこの本の存在は知っていたので読みたかったのです。東大の図書館にあるというので総合図書館に行ったら紛失していたため、結局読めず、最終的には筑波大学にあったコピーを前田潮さんから頂いて熟読し、後にお守りのようにしてハワイ大学に持っていった記憶があります。

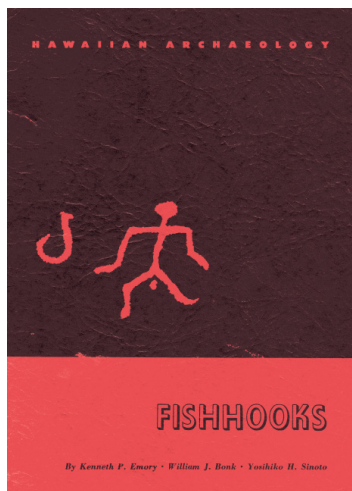


図2

けがの巧妙ですが、そのときに偶然仁さんから割り当てられたのが、ラインマンの *Fishing* です。この本は私の研究人生に影響を与えた本のベスト5に入る本です。そこにはオセアニアのポリネシア人が海という環境に適応するために、どのような生態学的役割が釣針にあったかが書かれていました。この研究をモデルとして私は修論でアリュートやエスキモーや北西海岸インディアンにとって北太平洋の釣針が持つ生態学的意味について書きました。

#### ■渡辺仁の生態人類学

仁さんの真骨頂は生態学であり、アメリカのジュリアン・スチュワードの文化生態学にも近いように見えます。私は3年生ぐらいからスチュワードを読んで、「スチュワードの文化生態学とは違うのですか」と仁さんに何度か水を向けたことがあります。しかし、スチュワードの文化の核のモデルを仁さんはマルクス主義的に下部構造と上部構造というような捉え方をしていると理解していたようで、あまり気に入っていませんでした。

一方、仁さんは「技術と儀礼が対となって自然的側面と超自然的側面に対応する。どちらにもプライオリティーはない」という考え方を取っていて、技術と儀礼は社会を媒介として個人と環境を対応させるものであると考えていたようです。この脈

北大文学部公開講演(1980.6.7)  
渡辺 仁：北方文化研究の課題

(A) 民族文化の記載 (ethnography 民族誌)	(B) 民族文化の歴史 (起源と由来)	(C) 人類学的原理
(1) 構成要素の形態的研究 (解剖学的アプローチ)	(1) 史学的研究 (古文書による)	(1) 行動の原理の研究 (1) 文化(社会的遺伝)の機構 (2) 社会の構造と機能 (社会人類学) (2) 生活の構造と機能 (生態人類学)
(2) 構成要素の構造-機能的研究 (生理学的アプローチ)	(2) 考古学的研究 (遺物による)	(II) 歴史的原理(進化)の研究 (1) 人類学の研究 (民族誌・考古学による) (2) 考古学的研究 (遺物による) (3) 土俗考古学的研究 (民族誌・考古学による)
(3) 構成要素の生態学的研究 (環境生理学的アプローチ)	(3) 人類学的研究 (民族誌・考古学による) (a) 民族学的再構成 (b) 土俗考古学的研究 (4) "Ethnogenesis" (①②③ 集の総合)	

図3

絡で仁さんが評価していたのは、ロンドン大学で教えを受けたであろうダリル・フォードで、*Habitat, Economy and Society* (Forde 1934) という本をいつも勧めていました。最近もう一度これを読んでみたのですが確かに仁さんのアイヌ・エコシステム論とかなり近接する感じがします。

仁さんにとって、生態学と進化学は学問の両輪です。特に仁さんが唱えた生態人類学は、文化人類学や形質人類学、地理学、進化生態学の交差点にあると理解していたようです(図3)。そして、民族誌でも先史時代の研究でも、常に南北の比較を行って、それを進化論に組み込もうとしていました。アイヌを含めて、世界の諸民族が生態系の一部であることを記述の目的とし、漸移的に変化する諸民族の生態系を並べることで、全体として人類進化の図式が浮かび上がるというスタンスだったと思います。だから、バンド (band)、あるいは父系氏族 (clan) や混成氏族など、個々の社会の形成要因を説明しようとするスチュワードの文化生態学とは距離を置いていたように思われます。仁さんは、一つの社会の成立というよりも、それぞれの生態系をグラデーションで並べ、そこに進化の図式が見えてくるといった方法を取っていたと思います。

仁さんのそのような思考方式は、『ヒトはなぜ立ち上がったか』(渡辺 1985) (図4) や晩年の『縄文式階層化社会』(渡辺 1990) などに見ることができます。仁さんは「私



のことをあっちをやったりこっちをやったりしていて訳が分からないと言う人がいるけれども、私の中には地図がある。いわば囲碁の型のように、まずこの論文はこの布石、次の論文は次の布石と、最後に形を成すという構想があるのだ」とよく語っていました。

仁さんは、何事も構造的に2次元ないし3次元のモデルを提唱して考えることが多い人でした。晩年に『古代文化』に出された「土俗考古学の勧め」という論文に書かれている図式は、仁さんの考えておられたことを考古学などに適用する上で分かりやすいと思います。それは、まず道具系、それを取り囲む活動

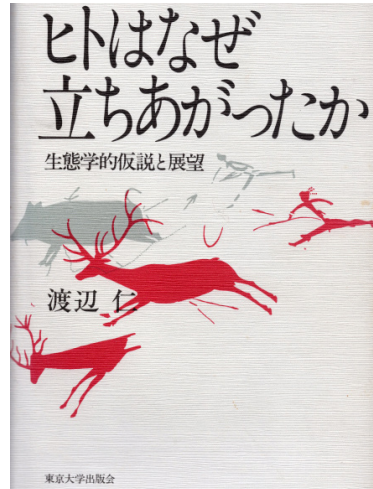


図4

系、そして生態系があるという考えです。道具系は、釣針と重りやカヌーとパドルのような道具同士の有機的な関係です。活動系は、それらの使用における行動パターンの全体像で、例えば石器なら、完成品だけではなくて石くずも含めて石器製作の全体像と見るような視点です。さらに生態系は、アイヌ・エコシステムのように男女差や年齢差などの異なった行動パターンの中に置いてみる、異なった生態ゾーンを見るというような視点です。

#### ■仁さんの厳しい指導

仁さんのゼミの指導はとても厳しかったです。英語の論文を割り当てられて発表するのですが、読みが甘い部分をことごとく指摘され、同じ論文を3週続けて発表させられることもありました。泣きそうになりましたし、泣いた後輩もいました。あいまいな読みは絶対に許してくれないのです。しかし、仁さんは学生をいじめているのではなく、納得いかないことは徹底的に問いただす指導をしていました。これは相手が学生でもたとえ研究者でも同じだったのです。大学3年生でも決して手加減をしませんでした。これはさすが勉強になりました。

それから、仁さんの前で形容詞や副詞を使うのはご法度でした。私が英文の考古学報告書の発表をしたときです。「1年目の発掘で疑問が出た点を、次の年の発掘でより深く理解できるようになった」と言ったところ、「深くとはどういう意味ですか？



深く掘ったという意味ですか？」と厳しく問いただされました。「深く」という言葉は、「深く掘る」とか「深く潜る」という意味以外では使ってはいけないという人だったので。仁さんの容赦ない問いは本当に勉強になりました。いまこんなゼミやったらハラスメントと言われそうな気がします、私もそのようなゼミを一回やってみなかったです。

仁さんからは「百万言より一つの図、一つの表」と何度も聞かされました。言葉で百万言を言うよりも図を一つ作りなさい、表を一つ作りなさいとたたき込まれました。有志でやっていたニューアーケオロジーの論文を読む読書会の後、先生に来ていただいて喫茶店でコーヒーをごちそうになりながら、「どんな抽象的なことでも、具体的なことから議論しなさい。例えばこの灰皿なら、その大きさ、形、重さから議論しなさい」と助言されました。これも理科系らしい発想かと思います。理系出身の仁さんは「研究者は博士号を取っていないと相手にされない」とも言っていました。想像できないと思いますが、当時、文学部で博士号を取るなどというのはまず考えられませんでした。博士号は、大先生が辞める直前に取る名誉称号のようなものだったのです。しかし仁さんは、「とにかく博士号を取らないと国際学会では相手にされない。就職の相手もしない」という雰囲気、全く取り付く島もありませんでした。だったらもうアメリカに渡ろうと思い、私はハワイ大学への留学を決意しました。

## ■ 2人目の巨人・大林太良

次に、大林太良さんの話をしたいと思います。大林太良といえば、誰しもが神話学の大家と思われるでしょうが、私と大林さんとの出会いは実は考古学でした。私が東大の考古学研究室に入ったとき、選択必修だった東南アジア考古学の講師を大林さんがされていたためです。おそらく当時、東南アジア考古学を講じられる研究者は大林さんぐらいだったと思います。大林さんは『世界考古学体系』アメリカ・オセアニアの巻（石田・泉（編）1959）でもたくさんさんの章を担当していて、誰も書き手がいない章を一手に引き受けるような人です。この講演では、神話研究ではなく、考古学や物質文化研究の立場から大林さんを振り返ってみます。

大林さんの講義の作法は、そのとき自分が書いていた東南アジア考古学に関する論考の原稿を読んで、学生はひたすらそれを速記するというものでした。清水展さんも「速記の練習になりましたね」と言っていて、大林さんの授業は本当に手が疲

れました。そして、後半になると、「君はどちら？」と聞かれるのです。それは「ドイツ語かフランス語か、どちらかを選びなさい」という意味で、選んだ言語の論文を割り当てられました。私はフランス語で書かれたベトナムの論文を割り当てられ、発表した記憶があります。



図5

私は大林さんには考古学の学生として接したわけですが、その指導法は、広い知識から学生の興味に合わせて、問題をより広いコンテキストで考える示唆を与えてくれるという形でした。大林さんは民族学者でもあり、考古学研究における民族誌の有用性も認めていたので、仁さんの土俗考古学とも通じるものがありました。しかし大林先生の全体像にせまるような論集は意外に少なかったようです(cf. 図5左)(ピオヒストリー編集委員会(編)2007)。私は南山の人類研の論集に、「大林太良の考古学・日本古代史研究」(後藤 2023a)という論稿を書いていますので、参考文献等も参照してください。

大林さんについて驚いたのは、われわれが何を質問しても「それは何年に出た何々の雑誌の、第何巻の、何ページぐらいに出ている」と記憶していたことです。のように頭の中で膨大な量の文献が整理されていて、ものすごい記憶力と情報整理力をお持ちだったと思います。また、私が留学を決意してハワイ大学へ向かうとき、成田空港で大林さんと奥さま、お嬢さまの3人と偶然出会いました。「ハワイ大学に留学します」と伝えると、「頑張ってください」と力強く両手で手を握ってくれたのを思い出します。先日アンソロジー(後藤(編)2022)(図5右)を出した際、奥さまにごあいさつのお電話をすると、「あのときね。タイに行くときだったのよね・・・」と懐かしがってくれました。

留学から帰った1988年以降が、私と大林さんとの出会いの第2期です。そのとき大林さんは欧米のプロセス考古学の論文を読んでいた、私にたびたびコピーを送ってくれました。既に読んでいた論文もありましたが、大林さんからの手紙で初めて

知る論文もあり、とても恥ずかしい思いをした記憶があります。大林さんは、初期の論文では文化と環境との関係、あるいは文化変化は部分的に説明できるとして、マックス・ウェーバーの理念型などを重視し、同時にジュリアン・スチュワードなどにも言及しています。

大林さんが日本考古学に衝撃を与えた縄文時代の社会組織論も、縄文時代には父系に重きを置く双系的な社会があったと推測しています。大林さんも日本の文化領域論や中国や北方の文化複合論などにおいて、生態学的な条件を重視していた点は仁さんと似ていますが、伝播や移動など歴史的な過程を同じ程度に重視したという、仁さんとは異なった人類史を希求していたと思います。仁さんと大林さんの人類進化史あるいは北方文化論は、今後対比していきたいと思います。

### ■大林の考古学研究

縄文時代や邪馬台国の著作でしばしば日本考古学に衝撃を与えていた大林さんですが、古墳時代についても論稿を書いています。それは水野祐さんの唱えた三王朝交代説を、オランダの古代国家循環崩壊論モデルで再考した論文です。ハワイでも王朝の循環崩壊はたびたび起こっていますので、大林さんとはこのテーマに関して議論のやりとりをした記憶があります。大林さんの論文を参照して自分が書いていた論文や、当時私が植木武さん編集の『国家の形成』（植木（編）1996）に書いていた人口論モデルの論文を送ったときのやりとりなどがあります。

三王朝交代説というのは、崇神王朝、応神王朝、継体王朝という系譜の違った王朝が三つ継続したという説です。崇神というのは最初の支配者で、確実に実在するとされる最初の天皇です。神武天皇から何代目かまでは実在かどうか分かりませんが、大和に王朝を立てた崇神は実在が確実な王朝ということです。応神というのはいわゆる河内王朝ですから、世界遺産になった巨大古墳を河内平野に建てた王朝、継体は日本海側の越前から出てきた王朝です。大林さんはこれを評価して、循環崩壊モデルを当てはめました。

そのときに頂いた大林さん直筆の葉書があります（図6）。大林さんの字は独特で、真偽のほどは定かではありませんが小学館には大林先生の字を解説する専門家がいたそうです。読んでみると、「拝復、お手紙と抜刷を有難うございました。崩壊モデルに賛成してくださり心強く思います。人口について言えば、データがないのですが、崇神のとき、病気で人口の大半が亡くなったことが『古事記』や『日本書紀』にあ



図6

るのは、おそらく何かの事実を反映していると思います。御本をまとめられるよし、大いにたのしみにしています。ただ、六興出版は6月末に倒産しましたが、ぜひ他の出版社でも出していただきたいと思います」とあります。

リーフレットもあります。「前略 一宮巡詣記をお送りします。12月に風邪をひいたので次回に体裁です。この前お話しした貴兄と秋道君をごちそうする件、1月にいつ東京に来ますか？ お知らせください」。これは大林さんが朝日文化賞を受賞したときのお祝いを秋道智彌さんと二人で行ったときに、お礼にごちそうするからということでした。今でも覚えているのですが、新宿のアフリカ料理店で、秋道さんと私、そして小学館の担当者の水上さんと武田さんと大林さんの五人でアフリカ料理をごちそうになりました（図7）。

## ■大林の神話研究との出会い

私と大林さんとのお付き合いの第2期、次の柱はやはり神話です。私はハワイ大学から帰ったときに、ハワイ考古学入門のような本の原稿を用意していました。それで、大林さんの朝日賞授賞式のパーティのときに、秋道智彌さんから中公新書の糸魚川さんを紹介していただき、駄目元の気持ちで原稿を読んでもいただきました。その頃、私は神話についてはほとんど無知でした。オリジナル原稿はオーソドックスな考古学の本でした。自然や生業や社会を論じた各章の冒頭に、お口直し程



図7

度に関連する神話の一部を2～3行書いていました。当時、神話には全然関心もなかったし、知識も断片的でした。すると糸魚川さんから、「神話を中心に書き直していただければ、ぜひうちでも出したい」と言われました。中公新書は高校生以来たくさん読んでいたあこがれのシリーズだったので、天にも上る気持ちで引き受けました。

しかし、神話は見当がつかないので、早速大林さんのご自宅を訪ね相談すると、あっという間に読むべき本を提案していただき、『ハワイ南太平洋の神話』（後藤 1997）という中公新書を1年ぐらいで書き上げることができました。神話研究は今でも私はもぐりだと思っていますが、今日までの著作や講演、あるいはカルチャーセンターなどで依頼される仕事は神話に関するものが一番多いので、大林さんがいなかった

ら今の自分はないと思います。

表や図を重視した仁さんに対し、大林さんが重視したのは分布図で、数多くの分布図を書かれています。一つだけ挙げると、大林さんの晩年の著作『銀河の道・虹の架け橋』（大林 1999）の中に掲載されている図があります。これは「銀河は渡り鳥の道」という神話素の分布です。見ると、一つはロシアの西の方と、北欧のフィンランドやスウェーデンに分布していて、もう一つはアメリカの五大湖の北にあります。

それとは別に、ロシアにベリョーツキンという人がいます。西側とあまりコンタクトができなかったソ連時代、ソ連の学者はひたすら文献で膨大なデータを集めていたのですが、ベリョーツキンもその1人で、何千という神話素を抽出してコンピューターに入れ、検索すると出るようなシステムを作り上げています。彼の論文で示された、「The Pleiades as opening, the Milky Way as the path of birds（昴が天に空いた穴、天の川が鳥の道である）」という神話素の分布を見ると、大林さんの分布とよく似ています。全く別途で世界中の神話を集めた結果、2人の研究者が独立して一致した結論に達しています。

今でこそコンピューターで検索ができますが、少なくとも大林さんは頭のコンピューターでやっていたわけなので、いかにすごいかがよく分かります。ただし、ロシアのあたりは大林さんのデータが少し薄くなっています。大林さんは語学に堪能な人でしたが、唯一ロシア語だけは堪能ではなかったそうです。そのためだと思いますが、ロシアのベリョーツキンの方がデータが少し多くなっています。

大林さんが基礎データ、議論の論拠の提示を引用文献とともに重視したのは、今日取り上げる他の3人の研究者と全く同様です。また、大林さんは北方研究者でもあることは、最後の比較のところでまた振り返りたいと思います。

### ■ 3人目の巨人・篠遠喜彦

3人目は篠遠喜彦先生です。ホノルルピシヨップ博物館の元・人類学部長で、オセアニアをやっている人なら誰もが知っている、ポリネシア考古学のパイオニアです。戦前生まれのいわゆる考古ボーイで、戦時中も大陸の考古学に興味を持ち、戦前の混乱した時期に中国大陸に渡るなど、本当に冒険少年だった方です。南山の人類学博物館にも関連する姥山貝塚にも関わっていました。篠遠さんのお父さまは、有名な遺伝学者でICUの学長を務めた篠遠喜人先生です。篠遠家の方針もあって、篠遠



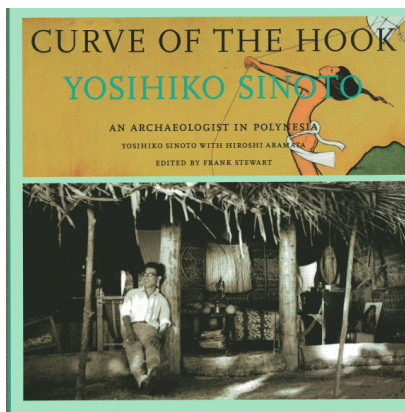


図8

さんは文部省の指導要領から独立した教育がなされている自由学園で学んでいました。おそらくそのために、日本の学校システムでは進学を考えず、最初からアメリカ留学を考えていたと篠遠さんは語っているようです。

篠遠さんは、もともと旧石器時代に興味がありました。戦後、まだ日本では旧石器研究が盛んではありませんでした。旧石器ではなく先土器といわれていた時代のことです。そのときに旧石器をやりたくて、カリ

フォルニア大学のパークレー校に留学することになりました。そこで船に乗ったら、途中のハワイでビショップ博物館のケネス・エモリー博士に慰留され、「発掘を見に来い」と言われているうちに結局ハワイにとどまることになってしまったというのは有名な話です。その後ポリネシア考古学のパイオニアになったのは、荒俣宏さんとの対談の『楽園考古学』（篠遠 1994）（表紙参照）、あるいはその英訳の *Curve of the Hook* (Sinoto 2016) (図8) でも語られています。テレビにも何度も登場したので、そちらをご覧になっていただければと思います。私も書評などを頼まれて某新聞に書いたこともあります。

#### ■篠遠さんとの関わり

私自身は釣針の研究をしたかったし、南方へのあこがれもあったので、ハワイで篠遠さんの指導を受けたいと熱望していました。仁さんもそれを勧めてくださり、留学を決意しました。ビショップ博物館にいた篠遠さんには、八幡一郎先生が推薦文を書いてくれ、篠遠さんの伝説的な研究室でお会いできました(図9)。八幡先生は戦前からマイクロネシアの考古学を開拓した方で、篠遠さんとも知己であったと思います。篠遠さんとは1968年に東京で行われた太平洋学術会議でシンポジウムを主催し、共著を出したりもしています。

私は、篠遠さんが発掘した5000点に及ぶ釣針と30遺跡以上の魚骨を自由に分析させてもらい、ビショップ博物館では至福の時を過ごしました。篠遠さんとポリネシアの釣針および編年研究は切り離せないので、私が総合監修をした沖縄の海洋文





図9

化館で、篠遠コーナーを作り、篠遠さんが釣針やポリネシア考古学を語る映像を今でも繰り返して流しています。篠遠さんがポリネシア考古学に果たした役割については、この後石村さんも話してくれると思うのであまり繰り返しません、ポリネシア人の新大陸起源説を唱え、コンティキ号の冒

険でも有名なトール・ハイエルダールなどとのやりとりの裏話もたくさん聞いています。ハイエルダールは最後まで自分の新大陸起源説を曲げなかったというのですが、実は篠遠さんからは「ハイエルダールは認めなかったけれど、晩年には自分の誤りを分かっていたようだよ」と聞いたこともあります。

私は日本に帰った後も、毎年家族を連れてハワイに行っていました。ハワイの日系移民のお墓の研究をしていたのです。1996年にアラモアナ・ホテルに泊まっていたときに、アラモアナ・ショッピングセンターの近くにPacific Bookという古本屋があり、そこで偶然12ドルで*Hawaiian Archaeology: Fishhooks*の復刻版を買うことができました(図2)。絶版になっていてハワイ大学にもなく、手に入ると思っていなかったの、「この夜、Dr. Sinoto 夫妻に夕食をごちそうになった」と汚い字でメモを残しています。

『楽園考古学』の英訳本には、マルケサスで発掘をしたときの発掘ノートなどが掲載されています。数日前に国際集会の準備とエクスカージョンでビショップには行ってきたのですが、今、篠遠研究室では、お弟子さんたちがボランティアで篠遠さんの手書きの発掘ノートなどを整理して、データに入れたりスキャンしたりしています。

#### ■公共考古学・実践考古学の先駆者、徹底的証拠主義

篠遠さんは、モアイ像やタヒチの神殿・マラエの復元にも多大な業績を残しています。マラエの復元に当たっては、地主関係も複雑だし、マラエには神聖観念も残っ

ていたので、地元の理解がなかなか最初は得られず大変な苦勞をしたそうです。「篠遠が遺跡を造っていると揶揄されたこともあったよ」などと笑っていました。

篠遠さんが成し遂げた考古学の業績の中で、釣針以外で有名なのは、フアヒネ島のカヌーの発掘



図10

です。これはホテル建設予定地の湿地から偶然、普通考古学では残らない木製品が出てきました。木製の手斧の柄のほか、カヌーの船体やパドル、垢搔きなどが多数出土しました。これは津波か大嵐で一瞬にして埋没した遺跡のようです。篠遠さんはホースで水を掛けながら発掘を続け、釣針や手斧の刃が埋まっていた状態を記録し、精緻な発掘を行いました(図10)。例えば釣針や石斧は普通横に寝て出てくるのですが、この遺跡では立って出てきたりします。一瞬にして大嵐に襲われ、しかもその状態が残っているということです。日本の考古学者なら出てきた状態を記録するのは当たり前なのですが、篠遠さんが発掘していたポリネシアではそうではなかったため、大変精密な発掘のモデルとなりました。遺物が出てきた状態からまず記録するという姿勢は、次に述べる遠藤庄治さんが民話を採集するときの姿勢と共通しています。

篠遠さんは、現地ではタヒチ語を駆使して地元の人と一緒に発掘を続けました。地元の女性教師が教え子を連れて参加しているのを見ることがありますし、退職したアメリカ人の方々が多いアースウォッチのグループも発掘を手伝っていました。考古学をパブリックに開き地元に戻元するという姿勢を持っていたのです。そして篠遠さんは、遺跡を発掘して復元した後、遺跡観光で地元利益が下りるようなという考古学観光の構想を持っていました。地元の人が遺跡を管理し、トイレやゲストハウスを作る、要は民泊、村落宿泊のようなものをつくる構想です。当時は公共考古学や実践人類学などがまだあまり話題にならなかった時代です。私は学生時代に篠遠さんのその構想を聞いてとても感動しました。つまり篠遠さんは公共考古学

や実践考古学の先駆者でもあったわけです。発掘、遺跡修復・保存という本来の考古学者の延長で、タヒチ語を駆使し、地元の方々や教員などと連携して進めるといふ人類学者の役割を地で行っていたのです。この辺の社会貢献に関しては、石村さんの話につながると思います。

篠遠さんは徹底的な証拠主義を貫いていました。一時期話題になったバヌアツで発見された縄文土器の件については、詳しくは荒俣宏との対談『南海文明グランドクルーズ』（篠遠・荒俣 2003）で篠遠さん自身が語っているのでここは割愛します。あのときは東北地方で旧石器の捏造が出た直後でした。旧石器の捏造をスクープしたのは毎日新聞なので、それに対抗したのか、別の新聞社が「バヌアツで出た縄文土器は、実はフランスの博物館のバヌアツのセクションにあった縄文土器だ。あれはもともと慶應大学との資料交換で持っていったものだ」と、さも捏造であるかのように書いたのです。証拠中心主義で、いかがわしいことで名を上げようという人では決してなかった篠遠さんは、とても憤慨し傷ついていました。ただ、バヌアツの発掘に行く前にビショップ博物館で会ったとき、「でも、証明できたら面白いじゃないですか！」と少年のように語っておられました。バヌアツで発掘して、縄文土器が本当に出たら面白いと、純粋に、証拠に基づいて夢を語る方だったのです。

篠遠さんは日本の縄文時代とポリネシアの関係にずっと興味を持っていたし、遠藤さんも同じですので、お二人とも大きな太平洋史を構想していたのは事実です。篠遠さんも遠藤さんも、仁さんや大林さんのように正面を切った人類史のような本は書かれていないのですが、個人的に知っているのでこの機会に言っておきます。

#### ■ 4人目の巨人・遠藤庄治

最後に取り上げるのは、遠藤庄治さんです。遠藤さんの出身畑は国文学なので、あまり人類学の方では知られていないかもしれません。かくいう私も遠藤さんのことは存じませんでした。遠藤さんとの出会いはある神話研究会でした。そのとき私は、ポリネシアの移住神話や実際に使われていたダブルカヌーや星の航海術について少々話をした記憶があるのですが、遠藤さんが食いついてこられました。コメントで、沖縄の平安座舟という、サバニを平行に並べるダブルカヌー一式の船があるということで話しかけてこられて、その後ずっと懇親会でも話し込みました。私は遠藤さんを存じていませんでしたが、その後、沖縄国際大学の教員として学生を指導して、7万話といわれる沖縄の民話を採集しているすごい人だと知りました。

遠藤さんは私の研究に関心を示してくれて、当時私が勤めていた同志社女子大で行っていた徳之島の調査などに同行したいと言ってくれました。遠藤さんが徹底的な調査をしているのを知っていたので、正直、少し怖気づいていました。その後遠藤さんからの強い申し出もあり、同志社女子大



図11

の学生と久米島の調査を2005年に行いました(図11)。

残念ながら翌年、遠藤さんは福島市の日赤病院で亡くなりました。たばこ好きだった遠藤さんは肺がんを患っていたようです。お酒は全く飲まなかったのですが、たばこは大好きでした。私は仙台に帰る途中に福島で途中下車してお見舞いしたのが最後でした。遠藤さん亡き後、弔い合戦として、沖縄本島屋我地島での調査をお弟子さんと同志社女子大のゼミ生と行いました。屋我地島調査は遠藤さんの遺言でもあったと思い、亡くなった翌年の2006年に行いました。

#### ■ 「声なき声を記録する」現地主義の調査哲学

遠藤さんが私のような若輩者との調査を熱望したのは、自分の調査のやり方、生きざまを私に見せたかったのだと思っています。その調査は徹底的で、例えば「カセットレコーダーの電池は毎日必ず取り替えよ」と言われていました。それは単なるテクニックではなく、遠藤さんの調査哲学が背景にありました。「調査は一期一会だ。今日聞いた話は次に聞けるとは限らない。だから電池が途中で切れることがあってはならない」。調査者がしばしば高齢であるから今日しか聞けないということもありますが、「調査は毎回の状況に反映される。同じ人が同じ話題を語るのでも毎回同じとは限らない。話者のそのときの気持ち、こちらの態度でも変化する。だから、今日聞けるものは話者の声色まで記録せよ」という姿勢だったのです。だから電池をけちるようなことは、そもそも基本姿勢として間違っているということなのです。要するに、調査は毎回真剣勝負であり、それが話者へのリスペクトでもあるという

ことです。これは遠藤さんから何度も聞いたお話です。

思い出すのは、遠藤さんが自分の政治的スタンスを吐露したことです。私はヤギが好きなので、いつもヤギを食べたいとばかり言っていたら宜野湾のヤギ料理店に連れて行っていただきました。そのときは自分が教えていた沖縄国際大学のキャンパスに米軍ヘリが墜落した2004年で、遠藤さんはそれに対して強い怒りをあらわにしていました。幸い死者は出なかったのですが、米軍は半径何百メートルも包囲して日本の警察を入れませんでした。SFなどでよくある、UFOが墜落するとアメリカ軍が占拠して誰も入れないというのと全く同じことが沖縄で起こったのです。遠藤さんは何か吹っ切れたように自分の政治信条を私に吐露しました。それは、遠藤さんが全学連時代の学生運動に参加していたときの話です。遠藤さんのグループは、確か初代委員長が文化人類学者の千葉大学の教授・中村光男氏でした。これは遠藤さんの調査姿勢、つまり「声なき民衆の声は、それ自身が記録する価値がある」という、話者が言葉を発した瞬間から記録していく姿勢につながると私は思いました。

遠藤さんの調査姿勢を垣間見た別の出来事があります。それは大東島の調査に誘われたときですが、結局飛行機が取れず実現しませんでした。大東島には飛行機しか行き来がないので、冬休みでしたが、島の人が買ってしまっていてチケットを取るのが至難の業でした。大東島は明治時代以降に入植されたので、創世神話のようなものは存在しません。われわれ内地の人間が沖縄の神話に興味を持つのは、今はそれほどナイーブな人はいませんが、例えば『古事記』や『日本書紀』の原型のようなものが沖縄にあるのではないかと参考になるのではないかと考えていたからです。明治時代以降の歴史しかない大東島になぜ行くのだろうかと思ったのですが、そこで遠藤さんの姿勢がよく理解でき、腑に落ちました。「どこであれ、そこで生きた人々の語りこそが大事である。人々の歴史に長短などによる価値の違いはない」というのが遠藤さんのスタンスでした。

また、久米島の調査で一緒したときに、遠藤さんが巻尺を持っているので驚いたことがあります。巻尺を持つのは考古学者なら当然なのですが、「例えば伝説の石のことを聞いたら、必ずその縦・横・高さを測って、形も記録しておきなさい。そのうち分からなくなるから」ということでした。これには驚きました。民話の研究なのに、巻尺を持っていつとにか記録しておけというのです。私はこのとき、遠藤さんはまるで考古学をやっているように思いました。

私は遠藤さんの追悼論集で、「ことばの考古学」と称して大林さんの研究方法との





図12

比較を行いました（後藤 2006）。遠藤さんの、偉人ではなくて声なき民衆の声を記録するということが研究者の使命であるという姿勢は、戦後の日本の考古学者が持っていた使命感とかなり一致します。だから私は、遠藤さんはことばの考古学をされたのだと思っています（図12）。

上江洲均先生の地元の久米島でも調査を行いました。上江洲先生は、私たちが調査に来ると知っていて泡盛を差し入れてくれて、一度、上江洲先生の家に参加してごちそうになったこともあります。そこで撮った記念写真には、沖縄研究両巨頭である上江洲先生と遠藤先生に挟まれて小さく

なっている私が写っていて、調査に同行した角南さんも少し緊張した顔をしています（図13）。同志社女子大学の学生には大部屋で寝てもらって、私と角南さんと長谷川慶太郎君という東海大学の学生は、四畳半ほどの小さな部屋で4～5日寝泊まりしていました。

遠藤さんの民話の調査は徹底的な現地主義です。一方、民話の共通性について、海を越えた交流のようなマクロな見通しを持っていました。だから私のポリネシア人のカヌーの話や移動の話にとっても興味を示されたのかと思います。拙著『南島の神話』（後藤 2002）をゼミのテキストにもしていたそうです。八重山における民話データベースの構築でも、サントリー文化財団の助成金を遠藤さんが代表で頂いたのですが、途中で遠藤さんが亡くなったので私が代表代行を務めたこともあります。

遠藤さんは南方に関心があり、民話でも航海術の話でも天文の話でも、ポリネシアとの比較、沖縄と南方との比較に実はすごく関心があったのです。基本的なスタンスは地を這う



図13

ような地道な調査をやっていたのですが、その延長上に夢のある構想を持っていたということです。ですから、少し偉そうに言うと、私は遠藤さんが遠くに見ていた夢の最後の目撃者になったような気がしています。現地主義・資料主義に徹していましたが、その先に夢のある構想を持っていたのは、遠藤さんも篠遠さんも同じであると思います。

■四人の巨人を比較する

四人の巨人の関係についてももう少し比較をしていきたいと思っています。仁さんと大林さんでは、大林さんの方が10歳も年下です。仁さんが主任教授をしていた考古学研究室に大林さんが教えに来ていたので、当然二人は認識合っていました。ただ、お二人が話す姿を私は見たことがありません。仲が悪いわけではなく、それぞれ認め合っていたとは思いますが。神話の文献研究者と言われる大林さんも、物質文化や考古学には大変造詣が深かった方で、さらに仁さんと大林さんは共に北方研究の大家です。

私は、四人の研究者を次のように自分の中で整理しています(図14)。マクロ、人類史的、学術理論的な研究をしたのが渡辺仁と大林太良です。渡辺さんが主に依拠した資料は、先史学や考古学で、物質文化と言ってもいいかもしれません。大林さんは言語伝承です。ただし、大林さんも考古学にも造詣が深かったので、この分け

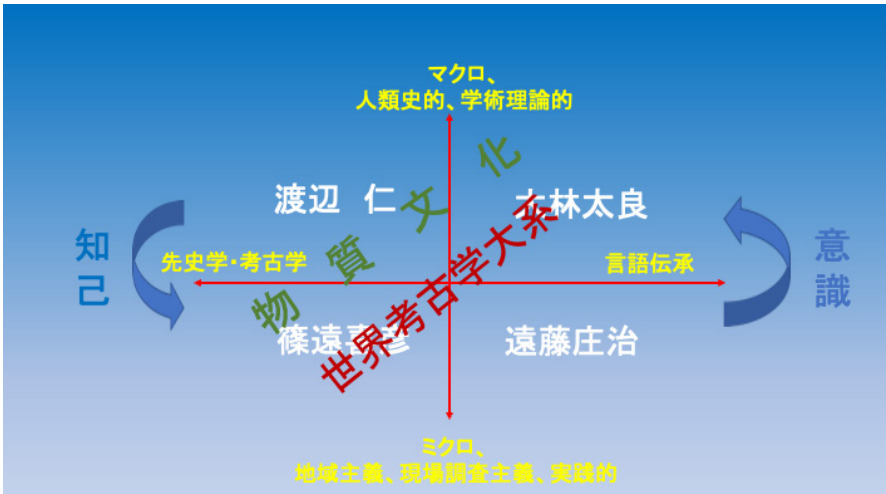


図14



方が全てだとは思わないでください。一方、ミクロで地域主義、現場主義、実践的な姿勢を持っていたのが篠遠喜彦さんと遠藤庄治さんです。遠藤さんも生前からNPO法人沖縄伝承話資料センターを立ち上げ、また沖縄の民話の会なども主催しました。民話を沖縄の社会に還元することを徹底的にされて、今もその動きは継承されています。篠遠さんと遠藤さんはこちらのサイドで、少なくとも私が学んだものはこのようなものだということです。

先に言うべきでしたが、渡辺仁さんと篠遠さんは考古学をベースにしていたので、当然物質文化の研究をしています。しかし大林さんも物質文化にはかなり造詣が深く、遠藤さんも、調査に巻尺を持っていったというぐらいですから、物質文化も全く無視していたわけではありません。また、篠遠さんと大林さんは『世界考古学体系』（石田・泉（編）1959）で同席していて、実は二人は日本の外国考古学のパイオニアでもありました。

渡辺仁さんは篠遠さんと知己であり、私がビショップの篠遠さんのところに初めて行ったとき、「先生は誰ですか」と聞かれて「初代オセアニア学会会長の渡辺仁先生です」と答えると、「ああ、仁さんですか」と言われました。お二人は国際学会で何度か出会っているようですし、「篠遠さんのところで釣針の研究をしろ」というのは仁さんが言ったことでもあります。それから、遠藤さんは大林さんのことを大変評価していました。文献も読んでいて、自分の研究は最終的には大林さんのような方が集大成するためのデータであるということを意識されていたようです。大林さんと遠藤さんがどれくらい知己であったか分かりませんが、日本伝承学会で大林さんが論文を書いたりしたので、すれ違っている可能性はあると思います。

仁さんと篠遠さんの共通の知人として、八幡一郎先生がいます。また、私と秋道智彌さんが会うと、いつも大林さんや仁さんや篠遠さんの話になります。遠藤さんと大林さんをつなぐ存在として、松山光秀さんという徳之島の郷土史家の方がいます。遠藤さんは松山さんのことを意識していて、知っていたのかもしれませんが。私が松山さんのところの徳之島に調査に行くというとき、一緒に行きたいとおっしゃいました。松山さんは大林さんの本もたくさん読んでいました。

それから、亡くなった山田仁史さんです。生きていれば四人目のパネリストとして今日必ず来てほしかったのですが、彼は文献中心で、大林さんの弟子のようになっていました。私は山田さんに「神話や民話をやるなら、ガチな現場を経験しなさい。調査を経験しなさい」と言って、遠藤さんに紹介しました。しかし遠藤さんはその

とき既に那覇の日赤に入院していて、その後郷里の福島に移られました。山田さんは1回だけ遠藤さんに会ったはずなのですが、その後遠藤さんも山田さんも故人となったので実現しませんでした。この2人はお元気であればつながっていて、しかも大林さんとのリンクもできただろうと感じています。

#### ■北方研究の大家：渡辺さんと大林さん

大林さんと仁さんは共に北方研究の大家であることはご存じだと思います。仁さんは当然アイヌ・エコシステム、その後、北大の教授をしたり、北海道庁が出している最後のアイヌの民族調査も指揮されています。大林さんは、東大を辞めた後、東京女子大の教授になり、その後、北方民族博物館の館長もされていますので、北方研究でも大家です。このお二人は、北方文化論、物質文化、民族考古学、住居論、土偶研究、縄文社会研究と、かなり近接する業績をお持ちです。お二人の研究スタンスの似ている部分と方向性が違う部分については、今後比較したいと思っているテーマでもあります。この後、大西さんには、北方研究の立場からお二人の研究をどう捉えるかお話ししてもらいます。

#### ■日本の外国考古学のパイオニア：大林さんと篠遠さん

大林さんと篠遠さんのつながりは考えたことがなかったと思うのですが、『世界考古学体系』というシリーズ本があります。戦後日本が復興して、やっと外国の研究をできる余裕ができたとき、それが文化人類学でもあり考古学でもあるのですが、そのときに平凡社から出たパイオニア的なシリーズです。私が熟読した本なのですが、その15巻に『アメリカ・オセアニア』（石田・泉（編）1959）という巻があります。先日、篠遠さんのレビューを書く機会があり、また大林さんのレビューを書く機会もあったので、彼らの執筆章を見てみると、大林さんはアメリカ、カリブ、オセアニア、メラネシアなどを書いていました。一方、篠遠さんは当然既にビショップ博物館で活躍し始めていたこともあり新進気鋭の研究者としてポリネシアを書いています。オーストラリアも書いています。このお二人はお互いをどれくらい知っていたか分かりませんが、日本の戦後の考古学においてオセアニアとアメリカ大陸というマイナーな地域の研究のパイオニアだったということです。

ちなみに調べてみると、この『世界考古学体系』には『東南アジア』という巻はありません。でも今は東南アジア考古学会があり、私も入っています。思い出があ

るのですが、大林さんの授業があった後、東大の研究室に行ったら、当時助手だった重松和男さんと、後に東大の教授になられた今村啓爾さんが大林さんと話していました。重松さんと今村さんが「東南アジア考古学会をつくりたいのです」と言うと、大林さんは「それはいいね」ということでした。「つきましては先生、会長になっていただけませんか」と言うと、「いやいや、君たち若い人がやりなさいよ」とおっしゃられていました。大林さんは結局ならなかったと思うのですが、東南アジア考古学会の設立にも頼りにされたということです。当時、東南アジアなどというのは、南アジアと東アジアの間とされ、日本の中ではあまり認識がありませんでした。その考古学の研究を推進した一つの柱となったのです。また、山川出版が出した『民族の世界史』の東南アジアの巻（大林（編）1984）では、大林さんと今村さんと宇野さんが東南アジアの考古学の概論を書いています。大林さんは銅壺（どうこ）の模様を神話学的に解釈するといったとても面白い論文を書かれています。

私の頭の中では、篠遠さんと大林さんはこのように日本の外国考古学、東南アジアやオセアニアの考古学、あるいはアメリカ大陸の考古学のパイオニアでもありました。言うまでもなく、アメリカ大陸はその後、東大の文化人類学の主戦場になります。私も寺田和夫先生に卒論の相談に行ったことがあるのですが、寺田先生は文化人類学の先生で私は考古の学生でしたが、「僕たちがアンデスをやったのは、江上波夫先生などの流れで東大の考古がメソポタミアをやっている、なかなか手が出せなかったからアメリカ大陸に行ったのだよ」などと聞いたことがあります。寺田先生も『世界考古学体系』の新大陸のあたりを書いています。

#### ■現地主義を貫く調査：篠遠さんと遠藤さん

篠遠さんと遠藤さんにも共通性を感じる点があります。仁さんと大林さんは、共に東大出身で、東大で教えた、いわば王道を歩いてきた人です。それがお二人にはプラスになっていると思うのですが、一方、そうではないルートを取ったのが篠遠さんです。篠遠さんは日本の通常の教育ルートを取らなかったということもあると思います。遠藤さんは立命館出身ですが、一時期学生運動でかなり活動した方なので、仁さんや大林さんと違ってオーソドックスな路線で育った人ではないような強さを持っています。だからこそ開拓者として大変魅力があると私は感じるわけです。

先ほど、遠藤さんの「声を発した瞬間を記録すべし」というスタンスを紹介しました。これに関しては、例えばライティング・カルチャーなどを経験した世代は、

客観的なデータなどはないと言うかもしれません。私も学問の世界に入ったとき、日本考古学の「遺物をして語らしむ」というとてもナイーブな実証主義的姿勢に実は反発を感じていました。つまり、「遺物も遺跡も、結局現代人であるわれわれの解釈が入らざるを得ない。だから自分の依拠する解釈的立場を意識すべし」と考えていたのです。それで日本考古学には居心地の悪さを感じていて留学したということもあります。しかしアメリカというのは天真爛漫な別の意味でポジティブな世界で、実証主義の世界です。解釈が言われるようになったのは、イアン・ホッダーの解釈考古学以降かと思います。ただアメリカの場合は、例えば新進化主義など、依拠する理論をはっきりさせてその上で議論するというスタンスがあったので、私にはそちらの方が向いていると思って留学しました。

一方、日本考古学が戦後、皇国史観を批判して、声なき人の営為である遺物とその使途状況を徹底的に記録しようとしたのは理解できます。同様に、遠藤さんは、とにかく話者が語る内容は全て価値があって記録するという姿勢を貫いていました。遠藤さんは別にロマンチックな意味の民話を収集しようとしていたわけではありません。沖縄の古老とお話すると必ず沖縄戦や戦後の苦労話が出てきます。それは通常の民話の理解には入らない話題だと思いますが、遠藤さんは、研究者が勝手に語りに価値を付けずに、まず話者に肉薄しなさいと教えてくれたのだと思います。それがテープレコーダーに象徴されていると思います。

篠遠さんはハワイ、ポリネシア、遠藤さんは沖縄という、自分の生まれた場所ではないところで、地元の人々を巻き込んで偉大な業績を残しました。篠遠さんが考古学発掘の姿勢、さらにフアヒネ島で見た現地の方々を巻き込んでいく姿勢、遠藤さんと篠遠さんが調査現場において実地で示してくれた現地の方々との調査の姿勢は、私が頂いた大事な遺産だと思っています。これは論文などにはしづらいので、今日のような機会に話させてもらったのは幸いです。

#### ■生態学・形態学の視点で整理する私の研究

最後になりますが、私は一時期、自分の自己紹介を「物質文化と言語文化の研究」と書いていました。物質文化と言語文化というのは相反するカテゴリーのように思えるかもしれませんが、私にとっては同じものでした。元々考古学で5000点ほどのハワイの釣針を分析したのが私の博論ですが、そのような物質文化を研究している人間で、その後勉強した言語学などを通して神話の研究などにも入っていきました。

しかし、神話も自分にとっては物質文化と同じことです。その形や構造を比較すること自体が面白く、さらに、その比較の上に立って、社会や文化あるいはコスモロジーなどと関係付けるのが面白いのです。

そのような物質文化と言語文化という軸がある一方で、形態学と生態学という軸があると私は整理しています。土器の研究でいうと、1997年にインドネシアのマレ島の土器に関する論文を二つ、あえて同じ年に同時に発表しています。一つは形態学で、もう一つは生態学だと思っています。形態学の方は民博に出した論文で、土器の形態や紋様の施文法、動作連鎖、身体技法などについてで、最終的にそれが認知の問題にも関わっていきます。私はそういうものを形態学と考えています。一方、同じマレ島の土器でも、土器製作集団の社会経済にとっての土器の販売システム（海人論、漁労＝土器製作＝交易者モデル）は、土器の持っている経済的、社会的な意味です。私はこれを生態学と理解しています。

同様に、言語文化研究ではハワイ日系墓石の碑文の研究を1990年代にずっとやってきました。例えば旧漢字を使っているのか新漢字を使っているのか、アルファベットなのか、縦書きか横書きかというような形の問題です。文字そのものを形として捉えるというようなことで、私はこれは形態学だと思っています。一方、例えば命日の表記が真珠湾攻撃前後から元号から西暦に変わるという現象は、碑文が持っている社会的戦略が含まれていると考えていて、これは生態学だと捉えています。ハワイ日系移民のお墓の写真をみると、「大正8年」の横に「1941年」と書かれていて、西暦表記に変わっています。このようなことは数多くの墓で確認されています。それまで日本人という意識を持っていた日系人が、戦争が起こってアメリカ人として生きようと意識を変えていったという戦略がここに反映されているのだと思います。さらに最近は「December」や「January」などと英語になっていくのでまた変化していくのですが、これは当然、日系人世代間の語学、とくに日本語能力の変化を反映しています。

私がこのようなことを考えるようになったのは、言語学を勉強したからです。言語学では音声学、音韻論、形態論、統語論などを勉強していきます。音声学というのは音声の研究です。音韻論というのは、音が言語の中で持っているカテゴリーで、例えば日本語ではrとlを区別しないといった言語ごとの特徴に関するものです。さらに形態学というのは、いわゆる単語の活用のようなことです。それから統語論があります。私はこれらを形態学だと思っています。一方、言語が社会の中でどの

ように語られ、どのような意味を持っているのかという実践論や談話分析、社会言語学というのもあって、これらは生態学だと考えています。このことがモデルとして私の頭にはあるのです。

歴史言語学や意味論は、形態学と生態学の両方の境界にまたがるものかと思いません。歴史言語学では例えばポリネシア祖語の語彙や音韻の復元をしますが、これは形態学です。一方、ポリネシア祖語に例えばチーフ（首長）やマナー、タブーといった概念が存在したらどのような社会であろうと推測することは、むしろ生態学です。意味論の方も、語彙分析として私自身がやっている事例では、ポリネシア語の魚名の構造分析は形態学であるし、例えばイトマキエイが「蝶々」という名前と呼ばれるのはなぜだろうと考えるのは象徴性の問題になってきます。そのような問題は意味論と捉え、両方にまたがっています。

最近行っている言語文化の形態論の研究としては、神話テキストのコーパス言語学やテキストマイニングがあります。これは大林さんの時代には実現しなかったのですが、今は神話のテキスト自体をコーパスとして統計的に分析させ、関係性を探るという方法が可能になっていますが、理化学研究所のプロジェクトなどの一環で行ったりしています。一方、神話の研究には王権論や世界神話学の研究もあって、人類が移動し環境が変わることがそれにどう関係するかということもあります。これは神話の生態学だと私は思っています。

一方、形態的な物質文化でいうと、カヌー形態の統計分析があります。これは今度人類研のモノグラフで出る『環太平洋の原初舟』（後藤 2023b）という本でも書いています。こういうことも引き続きやっていきます。このようなことは篠遠さんや遠藤さんのような方が集めた良質な大量のデータがないと可能ではありませんが、それはそれで大変面白いです。

古代舟復元プロジェクトや考古天文学は、生態学と物質文化との交差点に存在するプロジェクトだと思って、今楽しみながらやっています。古代舟復元プロジェクトというのは、例えば喜界島なら喜界島で手に入る材質で舟を造り、実際に浮かべてみるというものです。古老から植物に関する知識を聞いたりしながら楽しく舟を造ってみるという、生態学と物質文化の交差点にある試みかと思います。考古天文学も、遺跡と天文現象との関係から当時のコスモロジーや社会などと関係付けていく研究で、自分にとっては生態学と物質文化に入ると思っています。

## ■研究活動の社会還元

最後に、学問の研究以外にも、社会とのつながりということで、天文人類学と文化天文学と称して日本各地で活動を続けています。佐賀県の吉野ヶ里遺跡や鹿児島県の喜界島などで、地元の方々や学生などに解説を担当させるというプロジェクトを進めてきました。今年もやってほしいという話もあります。実際、私のゼミの教え子がイベント会社に勤めていて、今度は名古屋の小学生にも解説させるようなプロジェクトもします。メッツ大曾根というところで2023年8月26日にやると既に決まっているのですが、大学を退職したら、今度は小学校の子どもたちを指導することも楽しみにしています。

現在私は、Web等の自己紹介では、「物質文化と言語文化」という分かりにくい表現から角度を変え、「海洋人類学と天文人類学が専門」と書いています。海洋人類学は元々やってきた漁具やカヌーの研究の継続です。天文人類学については、大林さんは晩年、銀河についての大著を著し、次はお月さまの神話を準備していました。遠藤庄治さんは私のポリネシアや航海術や天文学の話に関心を示し、沖縄の天文の民話が圧倒的に宮古・八重山に多いのは、沖縄本島から宮古の間には距離があるので天体を使った意識が高いのではないかと考え、道半ばとなったサントリー財団の助成金でも沖縄と南方世界の天文神話の比較などを模索していました。だから天文人類学の方は、大林さんや遠藤さんに「やりなさい」と背中を押されているような気持ちでやっていきたいと思っています。そして海洋人類学と天文人類学を統合して、これからは「海／天（あま）の人類学」と自分を称していきたいと思っています（後藤 2023c）。

私は社会活動も大きな目標としています。昨年度は鹿児島県の喜界島サンゴ礁科学研究所の行っているサンゴカレッジ、佐賀県吉野ヶ里遺跡の「卑弥呼の見た星空」などを通して、「楽しく」をモットーに学外の活動を継続しています。今年は名古屋の小学校で行い、他のところからお声掛けがありますので、自分の研究を続けながら社会と関わっていくつもりです。これは篠遠さんや遠藤さんが教えてくれたことだと思っています。今後とも力が続く限り、「海／天（あま）の人類学」を柱として、研究活動や社会アウトリーチ活動を続けていきたいと思っています。これが、4人の巨人から頂いた遺産を自分なりに受け継ぎそれを研究と社会に還元していくための方法ではないかと思っています。